講座資料　　　　　　　　　　　　　　　　　　　２０２１年６月２６日（土）

テーマ：「ただ礼拝＝いつでも坐禅」の実践（但行礼拝‐不断坐禅）

●「但行礼拝」… 法華経の言葉。

・横田老師の「常不軽菩薩」の文。「常不軽菩薩」「人生は礼拝行」

　10歳時の体験。

目黒老師が全員に「皆様は仏さまです」と合掌礼拝。

　　自分の身中に鎮座している神々をお祭りする（大切にする）ことが坐禅。

・この二つがようやくつながったように私（佐々木）は思えています。

「但行礼拝」と「不断坐禅」

・気づいた一番大事なこと：

　「背中（or腰、呼吸等）」に意識を向けて、訓練する（orコントロールする）方法や、「コントロールしようとせず、ただありのままに見る」実践などを長らくやってきたが、釈然としなかった。（「背骨を立て起こす」とか「腰を立てる」を直接「背骨」や「腰」に意識向けても堂々巡りでは？）

・そういう中での衝撃的体験：迅雷霹靂

私が「礼」を一番深く学んだのは、フィディアス作ディオニュソス。

　フィディアス作ディオニュソスから受ける「命の泉」「命の気息（いき）」「命の火」体験。

　「礼を以て本と為す」が「本（先）」。常に礼を失わない姿勢（心掛け）が、結果、背骨や腰や息がベストになる。

◎法華経「」：

「… **、 、 …』…** 。」

書き下し分：　…をくす。してこのをす、「らをくう、てせず…」、ただをず。

**はただ はいらず のぞ なりける**

◎横田老師のブログ「常不軽菩薩」（2020.09.04）

円覚寺の開山、仏光国師の語録を学んでいます。

毎月一回東慶寺を会場にして、数人で学んでいるのです。

只今は、会場に集まることができず、リモートで行っています。

仏光国師のある日のお説法に、こういう言葉がありました。

仏教には、五千四十余巻と言われる大蔵経が伝わっています。

また八万四千の法門ありとも言われます。

すると、それらの経巻の中には、何万もの言葉があります。

その言葉の多さを、仏光国師は、百千も万も、百千億万も、はてはガンジス川の砂の数ほどのたくさんの言葉があると表現されています。

それどころか、百千万のガンジス川の砂の数ほどもあると言われます。

それほど膨大な言葉も、結局は一句にすることができると言うのであります。

どんな一句かと言えば、それは

「**我敢て汝等を軽んぜず。**

**汝等皆當に作佛すべし**」

という言葉というのであります。

これは法華経の常不軽菩薩品に出てくる言葉であります。

意味は、

「**わたくしは、あなたがたを軽んじません。あなたがたは皆、仏になるのですから**」

というものです。

法華経に常不軽菩薩という菩薩が出て来ます。

この菩薩は、相手が出家であれ在家であろうと、男であろうと女であろうと、だれにでも礼拝して、このように言われました。

「**わたくしは、あなたがたを深く敬います。**

**あなたがたをけっして軽んじず、あなどることをいたしません。**

**あなたがたは皆、菩薩道を行じて仏になることができるのですから**」と。

この菩薩は経典の読誦もせず、このようにただ礼拝の行だけをおこなっていました。

たとえ遠くに人々がいるのを見ても近づいて行っては、

「**わたくしは、あなたがたを軽んじません。あなたがたは皆、仏になるのですから**」と礼拝したのでした。

ところが人々のなかには、心が濁っていて、かえって怒る者もいました。

かれらは比丘に悪口を浴びせて、罵りました。

仏になるなどといい加減なことを言うな、そんな予言など信じられるかと言ったところです。

そうして罵られても、或いは石を投げられても、杖で打たれても、それでもなお逃げながらも、

「**わたくしは、あなたがたを軽んじません。あなたがたは皆、仏になるのですから**」と言っていたのです。

そこで、常に軽んぜずという名前がついたというのです。

一人一人を軽んじることなく、みな仏になるのですと言って拝む心、これこそが大乗仏教の精髄にほかなりません。

古来この言葉こそが、法華経の神髄であるとも言われています。

あの良寛さんも、この常不軽菩薩をこよなく敬われました。

「**僧はただ万事はいらず常不軽菩薩の行ぞ殊勝なりける**」

と詠われたほどです。

こんな言葉を、仏光国師もまた、百千万億の経典の言葉を凝縮したものだと仰せになっていたのであります。

御開山仏光国師の慈悲心の深さに改めて敬服するばかりであります。

●「おそれ」に関する文章

寒山詩の一句（清水文雄［1903-1998］）

**源窮水不窮 (源窮まって水窮まらず)**――この一句が寒山詩集にあることを教えてくれたのは、唐木順三さんである。それは、昨年九月わたくしが本校の校長に就任するすこし前のことであった。

　寒山はいうまでもなく、森鴎外の名作「寒山拾得」の寒山である。この小説にも出てくる、中国浙江省台州府の主簿問丘胤は、寒山の没後かれを追慕して、その遺作の詩三百余首をあつめ、それに師の豊干と道友拾得の詩を加えて一巻にまとめた。それが現伝されている寒山詩集であるといわれる。

　唐木さんは、「**人智人力で窮め尽くし得ないもの対するに畏敬の念を現代人は失おうとしているのではなかろうか**」という文明批評的観点から、「おそれ」という感情について書いたエッセイのなかに、右の詩句を引用しているのである。

　校長就任の直前に、この一句を知ったことは、わたくしには奇縁としか思えない。この「縁」を大事にする意味で、同僚井上桂園教授に揮毫を乞い、このほど表装の額も見事にできあがって校長室の壁間に掲げることができた。**水源は探究され、解明されたが、水は相変わらずこんこんとわき出てつきない。そこには人智人力を超えた不可思議な世界がある。そういうものへの畏敬の念を失ったところに、現代の不幸は根ざすのであろう**。

　**わたくしは登校すると、墨痕あざやかなこの詩句の前にたたずみ、心の姿勢を正して、朝礼台に立つのが常である**。

(昭和四十年四月)

●唐木順三「おそれといふ感情―ある泉のほとりで思ったこと―」

『唐木順三全集第９巻』筑摩書房）

　私の好きな寒山詩の中の一句は次のようなものである。

　「**尋究無源水、源窮水不窮**（**無源水を尋究すれば、源窮まって水窮まらず**。じんきゅうむげんすい、げんきゅうすいふきゅう）」

　人は水源を訪ね求める。下流から遡って、次第に上流に上る。そして、遂に水源を探し出す。それはあたかも科学の研究方法に似ている。結果から原因を探り、原因の原因を探り、原因ではあるが決して結果にはならないところの、いわば第一原因、根本原因にまで遡るだろう。それが寒山の第一句、「尋究無源水」の具体的また人性的意味といってよい。人性的と言ったのは、人は窮極原因を探し出すまでは不安だが、それを窮めつくせば安心してそこに腰をおろすという習性を持っているからである。人は原因不明の出来事に対しては不安であるが、これこれしかじかの原因によってこの結果が起ったということが判明すれば、そこで一安心する。科学の進歩とは原因解明の進歩といってよい。例えば癌の発生原因はまだ不明であるから、癌は治りがたく、従って人を不安にしている。癌の原因が判明すれば治療の方法も可能になる。その原因を探求することに現代医学は最大の努力を傾けながら、いまだにそこまで進歩していない。しかしいつの日かその原因は探し当てられるだろう。それもまた「源窮水不窮」の一ケースである。

　ところで、**更に一層肝腎なのは、第二句の「源窮りて、水窮らず」である。水源は探究され、解明されたが 水は相変らず滾々とわき出ているというのであろう。人跡未踏の昔からと同様に、水は湧き出ている。人に知られようが知られまいが、我関せずと日夜に湧き出て窮るところがないというのである。**科学はさまざまなことを解明し、進歩してきたが、山は高く、谷は低きこと、眼は横、鼻は直なることに変りはない。その変りのないところを窮めよと、禅はいうだろう。窮めつくして窮みなき辺際、しかも常住日夜、私たちの周辺にあるもの、いな、私そのものをこそ窮め来れと、寒山はいうだろう。源窮水不窮、どこまでいっても水は水として湧き出てやまない。

泉は水不窮として、どこか神秘的である。科学の至りえない境として、どこか形而上的である。人は泉をそういうものとして感じてきた。…

…　水田を灌漑する水、また飲水を与えてくれる場所として感謝するとともに、もう一歩、利害を超えたところで、源窮水不窮という姿に、一種の形而上的なもの、人力人智以上のものを感じたのであろう。そして、それを畏れ敬したのでもあろう。神聖なる場所は穢してはならぬ。粗末にしてはならぬ。みだりに立入ってはならぬ。そういうことを感じ、それを子や孫たちにも言いきかせたであろう。そしてこの泉の湧くところは、村人たちによって畏れられながら、保護され、保存されてきた。ときにここを穢す不埒なものがでれば、村人の制裁もうけたろう、所拂いにもされたろう。

　私はいま「**畏れ**」という言葉を使った。**私がおそれといったのは、ある偉大なるもの、人力や人智の及ばないものに対する畏敬の念である。**このごろ「話し合い」という言葉が流行している。話せば解るという前提に立って「話し合う」ことによって、解らないこと、むづかしいことを処理しようとしている。それは一方ではよいことである。自分の意志や思慮分別を言葉によって表現できるようになったのは、格段の進歩である。**同時に然し他方では、話し合いによって万事処理できるというような僭越を、無意識のうちに呼び起してきてもいる。人智や人力で解決できないようなことはなにもないという傾向を呼び起してきている。従って、神聖なもの、人智人力以上のものを認めまいとする。従って、私のいう「おそれ」という感情、情緒も、急速に消失しようとしている。これはなかなか重要な問題を含んでいると私は思う。**

　美しい泉の湧くところ、樹齢何百年の老木の聳えるところ、昔の人のおそれたところへいって、ジュースの空缶、サイダーのビンを捨て、チョコレートの銀紙を捨て、樹皮を削って我が名を刻み、等々という所行も、おそれの感情のないところからは当然に起きてくる。…

…　私がここで特に問題にしているのは、社会道徳や公徳心という人間と人間との関係だけの問題ではなく、人間と人間を超えたものとの間の関係、また自分と自分以上のものとの間の関係についてである。もちろん、人は人に対して恐ろしいと感じたり、恐怖心をもったりする。私がそれと区別して「畏れ」という文字を使ったのは、人間の人間に対する恐怖心とは違った「おそろし」という感情を、それにおいて示したかったからである。社会道徳や公徳心は、教育の仕方、テレビやラヂオやジャアナリズムなどを通しての躾けの仕方によって、徐々にではあるがよい方へ向っているし、また向いうるであろう。

　然し私のここで言っている「畏れ」の感情は、公徳心の場合のように簡單ではない。というのは、**近代という時代は、ここにいう「おそれ」をなくそうとする方向にすすんできたからである。近代化ということは、いわばおそれの感情、情緒を払拭することにほかならなかった。十七世紀のデカルト以来、人間理性の力を信じ、理性を正しく行使するならば、世に不可解なことはなにひとつないと信じ、人智人力の無限の能力を信ずるという方向を辿って今日に到った。それが近代をして近代たらしめている根本的な特徴といってよい。従って人智人力以上のもの、形而上的なもの、神聖なものを、人智の未発達時代の遺物とするか、無用の長物とするか、または無視するか、そういう方向に進んできている。つまりは、おそれという感情を不用のもの、無用のものとしてきたのである。**それがヨーロッパの近代の特色であるが、ヨーロッパはその科学技術的先進性のために、世界の優位に立ち、ヨーロッパの近代が即ち世界の近代ということになった。日本の近代化は敗戦後においていよいよ促進されてきたのだから、おそれなどという感情が青少年の間から消え去っていったのもまた当然といえば当然であろう。…

　**「おそれ」も「はづかし」も、自己を超えた存在との関係から起る感情である。そして自己を超え、人智人力を超えたものを無用にし、拒否することによって成立した近代が、そういう高度の感情を失っていくことも、当然といえば当然だが、この当然は正当とはいいがたい。**むしろ今日では、近代や近代化を批判し、近代が人間を如何にアトム化し、矮小化したかということを考えてみるべきである。**自然は人智によって分析され、解明しつくされるほど浅薄なものではない。大きな自然のいのちに触れることのなくなってしまうとき、人間生活はその奥行を失ってしまうだろう。寒山詩の「尋究無源水、源窮水不窮」は今日でもその具体的意味を失ってはいない。**

（唐木順三「おそれといふ感情　―ある泉のほとりで思ったこと―」『唐木順三全集第９巻』筑摩書房）

●白隠禅師の言葉：

**はただののみ。… はにず**。… **、、にの、くにせり。かくのくのをせんとせば、… をし、をにたし、せよ**。

**の、のにても**…。

、、のにて…。